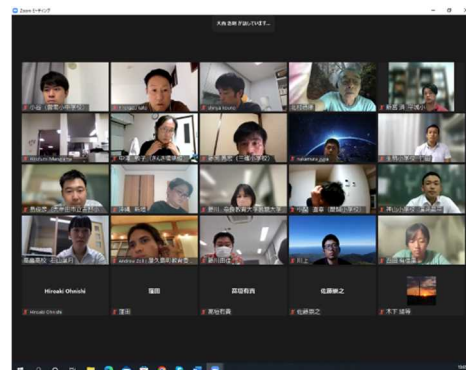


第6回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇実施日時 2022年9月27日(火) 19時～21時
- ◇方法 ZOOMによるオンライン開催
- ◇参加者数 36名
- ◇内容 単元構想案の相互検討②



【ルーム1】担当：中澤静男

(1) 藤川由佳先生（奈良市立平城西小学校）

小学4年 社会科+総合「シカと共に生きる奈良のまち」

導入「奈良のシカについて知っていることを出し合おう」

シカが身近に生息している地域とそうでない地域では、シカに対する印象に差があるだろう。

中心発問「なぜ「奈良のシカはかわいいだけでは済まされない」と言われているのだろう」

奈良のシカの現状に対する多面的な調査活動が期待できる

深める発問「奈良のシカが天然記念物になった理由を考えよう」

奈良のシカと人の長い歴史

シカと人の信頼関係が基盤にあることに気づかせたい

発展させる発問「共に生きていくために、私たちはどうしたらいいのだろうか？」

長い年月にわたり、シカと人は共生してきた。それは奈良の人の地域アイデンティティも形成している。この関係を次世代にも受け継いでいくために、自分は何をすべきだろうか？（世代間の公正）

【相互検討】

- ・山形・東北地方にはマタギの文化という人とクマの共生の文化がある。クマは神様の遣いなので、狩ったクマの肉や皮、内臓や骨などすべてを使い切る。野生動物との共生は多様である。
- ・シカと共生していくことが前提として学習が展開されているが、たとえば「クマとの共生」はどうだろうか？「外来種との共生」、「カラスとは共生できるか」など、野生動物を入れ替えることで、野生動物との共生についての思考が深まるのではないか。
- ・野生動物との共生に関しては、心の中で身近であるかどうか、親しみを持っているかどうかにも影響するだろう。
- ・シカに実際にふれる機会をつくることで、ESDで重視している五感を通じた理解を進めたいが、今は家族一緒に休日に奈良公園に行ってみようで留まっている。秋の遠足が利用できないか検討中である。
- ・学校での学習で終わるのではなく、シカについて考える糸口になればいいと考えている。
- ・奈良公園周辺で暮らしている人、観光客、お店の人など、多様な人へのインタビューを行うことで、自らのシカに対するイメージの見直し等、クリティカル・シンキングを促すことができるだろう。

(2) 本越暁葉先生（熊本県菊池市立旭志小学校）

小学校1年 生活科「いきものとなかよし」

児童の生活環境に多くのウシ、ヤギ、ブタなどが飼育されており、それらがいることが児童にとって「あたり前」になっている。

導入「学校で見つけたムシについて出し合おう」

- ・校内でムシ取りを行った。「持って帰りたい」「飼いたい」
- ・学校でムシを飼うという「命を預かる体験」を行った。

中心発問「どうしたらムシと仲良くなれるのかな」

- ・飼い方を調べて飼い始める。死んでしまうムシもいる。

深める発問「これからもムシとなかよくしていくにはどうしたらよいか」

- ・「飼う」ことは「命を預かる行為」であることに気づかせたい。

発展させる発問「他にはどんな生き物がいるかな」

- ・あらためて生活環境にたくさん見られるウシ、ヤギ、ブタに目を向けさせる。
- ・ムシを飼育してうまくできた・できなかった体験が、家畜を育てている人たちの営みを理解する下敷きになる。

【相互検討】

- ・命をつなげるために自分が何ができるかを考え、行動化を促すことでE S Dの授業となる。
- ・畜産農家・酪農家をゲストティーチャーにむかえ、「営みを学ぶ」ことが、「命を守るための営み」を学ぶ時間になっていく。
- ・命のつながりには2つある。横のつながりとは「食う」「食われる」というつながりであり、縦のつながりとは生殖による世代をつなぐつながりである。
- ・授業前後の児童の変容
単にムシに興味がある・楽しい→飼っているうちに「かわいい」という感情→「お世話しないとイケない」→「仲良くなれた」「死んでしまった」→自分の責任を感じる→命を預かる行為が自分事化する→家畜を飼育する営みを共感的に理解する下地になるだろう。
- ・人が手をかけることで生きていくことができる、豊かになる自然がある（例えば学校ビオトープ）ことに気づかせることは重要。一方、自然界で生きている生き物もいる。「自然界ではどうなっているんだろうね？」と投げかけておくことが、今後の学びに発展する可能性がある。
- ・守っていく必要のある生き物もいる＝絶滅危惧種
- ・自然界にも、温暖化や酸性雨など、人間活動の影響が広がっている。これらを考えるのはもっと先になるであろうが、投げかけておくことは大切だ。

(3) 石山葉月先生（山形県立高畠高等学校）

高校3年生国語科 現代文B 夏目漱石『こころ』

中心発問：夏目漱石の『こころ』の魅力はなんだろう。

教科書には3部構成の内の3つめの中の「先生と遺書」だけが掲載されている

- ・生徒の読書意欲は高いとは言えないため、部分的に読む「朗読会」を位置付けたり、生徒同士がディスカッションする場面を設定したりする。対話型の授業にしたい。

深める発問：どのような発信の仕方があるだろうか

→ ポップに着目させる（本屋に限らない）

読者に特に読んでもらいたいところを強調する

広げる発問：『こころ』のポップ作りをしよう

深める場面：ポップの相互評価をしよう

【相互検討】

- ・授業者である石山先生が感じる『こころ』の魅力
登場人物である「先生」の心理描写がすばらしく、手に取るように伝わってくる
- ・『こころ』は長くとりあげられてきた教材である。導入では、「その理由を探ろう」という入りの方が生徒の意欲が向上するのではないか。
- ・山形には「泣いた赤鬼」の作者である浜田広介がいる。『こころ』のような文学教材を学習した後、そこで身につけた作者の背景も考えるとといった「読み方」で郷土文学である浜田広介を取り上げ、発信してはどうだろうか。
→ 発展として浜田広介や宮沢賢治の「なめとこ山の熊」といった作品へと広げていくのもいいと思った。
- ・国語科における ESD 教材について
持続不可能な社会状況をつくるのも人間であれば、持続可能な世界を構築するのも人間である。国語科では、「人間を理解する」ESD 教材として取り組まれてはどうだろうか。

【ルーム 2】担当：新宮 済

(1) アンドリュー・ゾル先生（鹿児島県屋久島町 ALT ESD グローバルアドバイザー）

小学校 6 年「プラスチック汚染の解決をテーマにした ESD 英語学習」

- ・英語学習でプラスチック汚染から生物多様性の保護を考えたい。英語の会話に出てくるアニマル（動物）のなかにはプラスチック汚染に苦しんでいる種類がいることを伝えたい。
- ・英語学習から陸の動物たちもプラスチック汚染が深刻であることを伝え、脱プラスチックを考えたい。

→ 屋久島町では海のプラスチック汚染のテーマをよく扱うので、子どもたちも自分事であるが、陸のプラスチック汚染はほとんど知らないので、興味を持つだろう。

→ 海洋プラスチック汚染の大部分が陸で出されたプラスチックごみであり、川から流れることも事実。英語の教材として開発することは素晴らしい取り組みである

- ・探究活動も入れたいが英語学習でどこまでできるか不安（1 単元授業できるとのこと）

→ 調べ学習などすべては難しい。各学校に調べ学習を任せてみたち、アンドリューのように問題解決のための想いやライフスタイル変革を英語で屋久島の観光客に紹介してもいいかも

① 導入でアンドリューの陸のプラスチック汚染と解決のための行動変容を英語で伝えモデリングとなる。

② 探究ではアンドリューの資料を使い自分の興味ある動物のプラスチック汚染の実態を知り、アンドリューと同じように伝える

③ ひろげる活動として各学校で取り組む ESD（特に問題解決への想いや行動変容）を英語で紹介するために考える。

(2) 川上友大先生（鹿児島県屋久島町立安房小学校）

小学校 6 年総合「屋久島を舞台に進める ESD 平和学習」

- ・修学旅行先を知覧 特攻平和会館 に選んだ。鹿児島県では夏休みに登校して平和学習をする日がある。修学旅行をゴールに平和学習を自分ごとにしていくために地域教材として地域の戦争体験や遺構を教材開発中

- 戦争を自分事にしていくために、地域の戦争の跡に触れることは素晴らしい
- 修学旅行を導入にし、屋久島と戦争について考える学習展開もある
- ・ESDとして平和学習をするために必要なこと、行動変容は何を目指すか
- ・戦争反対といった簡単な答えにはしたくない
- 屋久島で戦争の語り手がほとんどいないことに目を向けてもいいのではないか
- 隣同士の平和からでもよい、ウクライナにつなげる切り口でいろいろある、それを自分事にして本気で解決のために考えることが大切
- 修学旅行先の博物館から命の重みについて迫る学習はどうか
- 計画にあるように地域との交流・発信をしてほしい

(3) 濱崎昇平先生（鹿児島県屋久島町立神山学校）

小学校6年図工 「地域とすみよい街づくりを考える 屋久島ジオラマづくり」
～つくろう！ぼくたち・わたしたち未来の屋久島～

- ①総合で「よりよい屋久島にしたりするにはどうすればよいか」探究する
- ②図工では総合で考えたすみよい街を屋久島ジオラマにして、どうすれば思いが伝わるジオラマになるか学習していく。
- ③地域の人にインタビューし、神山の観光名称に橋をつくるプラン、屋久島の木材を有効活用した街づくりなど、地域の方の思いも入れた作品にする
- ④観光名称や役場などに展示してもらい子どもの「未来の屋久島」に意見をもらう
- 地域の人や、自分の体験をもとにすみよい街を考えジオラマにすることが素晴らしい
- 奈良では町の未来を考えるとときに世界遺産登録を学習し、人と文化財、自然とのかかわりを深く考える。屋久島の世界遺産登録を取り上げることで、これまで続けられてきた自然と人との関係を抑えていく必要がある。インタビューして聞いた地域の人々の持続可能な屋久島の町づくりと、世界遺産登録が一致していて屋久島の大人は行動化していることに気づき、あこがれてほしい。
- ジオラマの環境活動家とコンタクトをとり直接コツを聞けるのが素晴らしい、社会参画の新しい形を創ってほしい。

【ルーム3】担当：大西浩明

(1) 屋良真弓先生（沖縄県南風原町立南風原小学校）

小学校5年 社会「米づくりの盛んな地域」

昭和40年ごろまでは、沖縄でも米づくりはどこでも普通に行われていた。

沖縄の米づくりは、北部では結構さかんだが南部は水や土壌の関係もあってあまりさかんではない。

その中でも、社会科としての「米づくり」をしっかりと取り組ませたい。

伊是名島の東江さんを例に 米の二期作 「やっぱり沖縄の米はおいしい」

沖縄の米をPRする動画の作成 最後には「地産地消」を言わせたい

- ・バケツ稲などの取組もよくするが、もっと子どもに作業させたい
- 失敗させていいのではないかと大変さが実感できないと意味がない
- ・バケツ稲の土をあまり向かない南部に土にして、その大変さが分かるといいかも
- ・伊是名島の米づくりの資料の、どこを考えさせたいのかを明確にするとよいのでは
- 水の大切さ（特に沖縄では） 東江さんの米づくりにかける思いや情熱 など

(2) 新垣孝子先生（沖縄県糸満市立糸満中学校）

中学校3年総合「海洋教育」

これまで沖縄の海について多角的に学んでいる

3年生では、「海とともに生きる」をテーマに様々な体験をさせたい

南海トラフ地震が起きれば、糸満は津波に飲み込まれる地域

①災害時、身近にあるもので傷病者を救助する方法

自助、共助について考えさせたい

②大災害から学ぶ ～東日本大震災から学ぶ防災・減災～

災害時、避難所などで中学生の自分たちに何ができるか

③防災キャンプ

避難所で自分たちができることを実践しよう

最終的には、「そのときどうするか」を家族と話し合わせたい 小学生に指導させてみたい

・防災をいかに自分事にするかが難しい 分かっているけどできないことが多い

子どもは体験は好きだが、調べたり書いたりという学習が苦手 → NIEとの連携

・これだけいろいろ体験させるのは準備なども含めて大変だと思うが

→ 一人でやっているのではなく学年全体で動いている

学校の中に、全体で進めていこうという文化がある

・防災教育のゴールは、「家族の絆」だと思う

「そのとき」にどうするかをしっかりと話し合わせる事が大事だと思う

【ルーム4】担当：河野晋也

(1) 島俊彦先生（福岡県大牟田市立吉野小学校）

小学校「大牟田市動物園とのESD協働実践プログラム」

小学校のクラブ活動「ESDクラブ」の活動として、動物福祉に着目し、大牟田市動物園とコラボレーションする実践を構想した。

動物にとっての豊かさとは何か、動物園の生き物にとってどのような環境が望ましいのか、それを向上させるためにどのような取組ができるか、を考えながら、本当の豊かさとは何かを見つめなおしていく。児童が動物園の環境エンリッチメント（動物の飼育環境を改善し、その動物らしい望ましい行動を引き出すこと）を考えたり、動物園の協力を得て実践・観察する取り組みを通して、動物にとってのウェルビーイングとは何かを考えていく。

・最後の着地点（自分の生き方）にどう着地させるのが難しい。豊かさの捉え方について、他者との違いを認め合えるような着地点がよいのかなと考えた。

・通常の授業と違って、クラブ活動が頻繁にあるわけではない。その間隔をどのようにつなぐかも大切だと思った。

・家庭科の場合は、生活の豊かさとは、クオリティオブライフを言う。今回の実践とも関わりがありそうだと感じた。どのような「質」を求めるのかを考えていくことが、着地点を探す方向性として考えられるのではないか。

(2) 竹田光陽先生（生駒市立生駒小学校）

小学校第3学年「地域盛り上げプロジェクト」

生駒には、100年以上続く商店街があり、現在でも多くの人が足を運んでいる。子どもたちにとって当たり前光景であるが、ここに問いを見出すところからスタートする。大きなスーパーもある中でなぜ商店街がにぎわうのかを探究していく。子どもたちは聞き取りをしていく中で、昔からのつながりや、商店街を大切に思っている人の気持ちに気付いていく。この商店街がこれからも長く続いていくために、自分たちに出来ることは何かを考える。子どもたちはポスターを作成することを考えたが、一度そこで立ち止まり「本当にポスターが必要とされているのか」を商店街の人に問いかけ、自分たちの行動の意味を確かめながら実践していった。

- ・社会科のスーパーマーケットの実践と関連づけながら行っていく。
- ・商店街の人と子どもたちとにやり取りの中では、子どもたちを応援する地域の人の声も届いていた。それが子供のやる気にもつながったと思う。
- ・福岡市で同じように商店街を盛り上げる実践例もあった。似ている実践はできるが、場所によってその状況は異なるので、実践の中での迫り方もまた異なってくるなどと思った。
- ・「なぜ商店街が寂れていかないのか」という問いには、子どもたちが気付いていった“人情”に加えて、他にもきっと理由があるのではないかと。それを探究していくのもおもしろい。

(3) 加藤尋和先生（奈良市立興東小学校）

小学校6年「柳生の文化財の魅力を発見しよう」

地域にある円成寺は、運慶作の大日如来象が安置されているなど、長い歴史を持つ貴重な地域の文化遺産である。しかし経年劣化によって屋根の修復が必要となっている。多額の修繕費の一部をクラウドファンディングで募ったところ、多くの人の協力を得て目標額以上の金額が集まった。この取り組みを教材化し、貴重な文化遺産を守るために、どのような人がどのような取り組みをしているのか、またこれまでしてきたのか、そして自分たちに出来ることは何かを考えていく。

- ・大柳生の太鼓踊りのように、一度失われたものを取り戻すのは非常に難しい。そういうものを復興させる、エネルギーが大柳生にはあるのだろうと思うし、そういう魅力に気付かせることができる実践だと思う。
- ・クラウドファンディングは、現代版の「一針一草の喜捨」のよう。クラウドファンディングに至った理由や、重源さん公慶さんの思いなどにも触れると、子どものやる気もまた出てくるのではないかとと思う。
- ・昔からのものが残っているのには、それなりの理由があるはず。これまでも繰り返し復興されてきたもの。そういういろんな人の「残したい」という思いに触れさせて、子どもたち自身が「円成寺っていいな」「残したいな」と思えることが重要だと思う。

【ルーム5】担当：圓山裕史

(1) 藤岡晃宏先生（奈良市立三碓小学校）

小学校5年家庭科×国語×総合「食品ロスを考える」

- ・1学期から給食の残飯を減らす取り組みをしてきた。
- ・アンケートを児童・家庭・栄養士に行い、そういったところから問題や課題に出会う。
- ・牛乳の買い方についてのアンケートでも、奥から買うという意見は多い。

- ・行動化の部分では国語科として「取り組みを伝えよう」で学校全体に伝える。

(話し合い)

○藤岡先生

- ・教師主導で行っていいのか
- ・ゴールとして、学校全体に広げるのに躊躇がある。

○メンバーから

- ・児童の声から学習を進めるにあたっては、社会で食糧生産の学習をしているので、ノートなどから生産者の思いなどを拾っていったり、実際に出会ったりできるといいかもしれない。
- ・発信の部分で、児童から家庭にも発信できると、保護者への啓発になるのではないかな。
- ・消費生活では、家族構成など家庭によっても生活スタイルが違うので、一様に「これはいい」「これはよくない」とならないような配慮が必要。

(2) 小谷太一郎先生 (曾爾村立曾爾小中学校)

9年生国語科「曾爾村の良さを伝えよう」

- ・まずは生徒が知っている曾爾村の良いところを出させる。
- ・「調べる」の段階で他の地域の取り組みや広告などについての批評文を書く。
- ・「曾爾村を良くしていくために」というテーマで話し合う。
- ・行動化については、他校にプレゼンをしたり、行政への提案を考えたり、リーフレットなどを書いたりといったことを考えている。

(話し合い)

○小谷先生

- ・行動化の部分でやりたいことが詰め込まれすぎているのではないかな。
- ・「いい村とは」という定義や、どう導いていったらよいか。

○メンバーから

- ・小谷先生が悩んでおられるように、行動化の部分が壮大になっているので、マストの部分と+αの部分を設定してはどうか。
- ・「いい村」というのは誰にとってなのかをはっきりさせるべきではないかな。
- ・地域の課題を見つけるというのが難しいのではないかな。地域の人から話を聞いた方が気づきや自分ごとにしやすくなるのではないかな。また、曾爾村をよくするために話し合う際には、課題をしぼらないと広すぎて収集がつかないかもしれない。
- ・地域の課題といったネガティブな感じよりも、他校にプレゼンするならば「こんないいところがある」とポジティブな感じの方がいいのではないかな。
- ・観光客向けのマップなどに生徒が知っていることなどを入れてリニューアルするような取り組みも生徒の達成感につながるのではないかな。
- ・この構想案とは直接つながらないかもしれないが、岡山県の矢掛町の取り組みは曾爾村にも取り組めるヒントがあるかもしれない。